

大学 - 附属連携を活かした国語科・英語科授業の試み

A Synergistic Class of Japanese and English:
Taking the Advantage of the Collaboration between University and Attached Schools

于 一楽*
Yile YU

松丸 真大*
Michio MATSUMARU

牧野 尚史**
Takashi MAKINO

永田 郁子**
Ikuko NAGATA

* 滋賀大学教育学部 ** 滋賀大学教育学部附属中学校

<キーワード> コラボ授業 反転授業 教員養成 教科横断 大学 - 附属連携

1. 概要と目的

松丸・于 (2021) で指摘したように、「ことば」の教育においては、国語教育と外国語教育の連携が推奨されている向きがある。2020年度より、本学で英語学と国語学を別々に学んできた学生に対して、于一楽と松丸真大は教科横断型の「コラボ授業」をはじめた（詳しくは松丸・于 2021 を参照）。2022年度も引き続きコラボして両領域を同時に扱うことにし、さらに本年度は、新しい試みとして、附属中学校の英語科の牧野尚史と国語科の永田郁子の両氏を加えて、大学 - 附属連携としても「コラボ授業」を展開した。なお、言語を横断的に教育したほうが効果的であるという発想は、実は目新しいものではない。古石篤子 (2016: 24-25) によれば、1970年代から80年代にかけてイギリスでE. Hawkinsらによって展開された「言語意識 (Awareness of Language)」教育という考え方があり、この教育では「ことばの力」の重要性を主張し、すべての言語教育 (母語教育, 外国語教育, 古典語教育) を統合する必要性を訴え、カリキュラムに「language (ことば)」という科目の導入を提言したとある。

蓮尾 (他) (2009) でも学部教員と附属学校教員による連携授業の試みが報告されているが、そこでは、主に大学教員が附属学校の生徒に授業を行うことで、学部と附属教員間の相乗効果について論じられている。機関を跨がないコラボ授業においても、日本人学生への英語教育担当教員と留学生への日本語教育担当教員のコラボ (Shimazaki et al. 1995), 英語教員と倫理担当教員のコラボ (国重・小川 2011), 音楽と美術のコラボ (向 2014), 東京都板橋区立中台中学校 (2021) の実践レポートがある。

これらの取組のどれとも異なるわれわれの取組について、次節以降で、実践内容とその成果について紹介する。まず2節では大学生と中学生で行った内容について大

学側から報告をする。つづく3節では附属中学校側から、活動内容に関して、報告をする。4節では今回の取組みに対する評価と今後期待される効果について述べる。¹

2. 大学からみた2022年度の実践例

前節でも述べたように、コラボ授業を行うのは2022年度で3年目となる。2020年度は「試み」の段階で、英語と日本語に共通して現れる言語現象について、英語学と国語学 (日本語学) の観点から解説を加えるという「教員側のコラボ」をおこなった。2021年度は「融合」の段階で、前年度の要望や反省を踏まえて、「学生側のコラボ」を目指した。これにより、英語学と国語学の融合が実現できたと考える。そして2022年度は「発展」の段階として位置づけ、大学で獲得する学問的な知識を教育現場で活かすことを目指して、大学と附属学校との連携を試みた。本節では、2022年度の構想・テーマ・授業の進め方について、昨年度までの取り組みと関連付けながら述べる。

以下、2.1節でこのような計画に至った経緯を説明した後、2.2節で具体的な授業の進め方について述べる。

2.1. 今年度のコラボ授業の構想

2021年度コラボ授業の特徴は次の通りだった。詳細については松丸・于 (2021) を参照されたい。

- テーマを絞る: 「2種類の自動詞」 (非対格性仮説) という、日英語に共通しつつも違いがある現象をとりあげて、日本語と英語の立場から、各グループが検証した。
- 反転授業: 授業の前半は授業回とチュートリアル回という2つの授業形態を交互に行うことで、新規知識の獲得と、その知識を用いたディスカッションで、学んだことを「使える知識」に昇華させる練習をした。
- 学生のコラボ: 授業の後半は国語学と英語学の学生を1つのグループにし、グループで議論を重ね、結

論を導き、共同で発表するという形態をとった。これにより、国語学・英語学がお互いに足りないところを補い合って議論を発展させていくことを目論んだ。

(a) については好評だった一方で「すぐに答えが出ない問題に取り組むのが苦しくもあり快感でもある」という、理論言語学特有の悩みが聞かれた。(b) については「講義を何度も見返せる」「他の人の意見を聞いて理解が深まる」と好評だったので、今年度も採用する。(c) については、「グループを作る時期が遅い」「グループのメンバーとの時間調整が難しい」という問題点があった。

そこで本年度は、次のような点を取り入れて進めることにした。

(d) 専門家会議

(e) 理論と実践の往還

(f) 附属中学校との連携

以下、順に説明していく。

(d) は昨年度有益だったものを引き続き採用するとともに、グループ内の議論を促進するために試みたものである。授業の前半は昨年度と同様、講義回とチュートリアル回を交える反転授業方式で進めた。また、昨年度の反省を活かし、授業の最初の段階でグループを決めることで、学期を通してメンバーが議論できるようにした。この際、英語・国語という専門の違いに加えて、教育実習で不在になる期間を考慮してメンバーの振り分けを行なった。授業の後半はグループワークを中心に進めたが、その際に「専門家会議」を導入してみた。これにより、グループ内での議論が活性化するとともに、グループ間で知識の共有と明確化がはかれるメリットがあると考えたからである。「専門家会議」の具体的な進め方については次節で述べる。

(e) は、2021 年度の (a) の反省点を踏まえて、言語学の理論を検証するのではなく、言語学の知識を教育の現場で活かすことを目標にした。このように考えたのは、次のような理由があったからである。

(e-1) 教育学部では多くの学生が教員を目指す。純粋に学問的な意義を追究することが重要でないわけではないが、それよりも学問と教育をつなぐ練習をした方が学生のニーズに合っている。

(e-2) 言語学の理論を扱うと、大学教員が知識を与える側で学生が教えてもらう側という固定的な関係が生まれてしまう。教育実践を目標にすることで、(少なくとも松丸と于の場合は) 大学教員が学生に教わるというもう一つの関係を作り出せると考えた。

そして (e) の延長に (f) がある。前述の通り松丸と于は教育に関する知識・経験が皆無のため、教科教育の専門家である附属中学校の先生に協力をお願いしてやることにした。英語科の牧野尚史先生と国語科の永田郁子先生に打診したところ、快諾してくださった。これにより、英語学・国語学という従来のコラボ関係に加えて、大学-附属学校連携という新たなコラボ関係が結べた。これが今年度の取り組みの最大の特徴である。

2.2. 今年度のコラボ授業の実際

本節では実際にどのようにして授業を進めたかという点について述べる。今年度は、于一楽の英語学Ⅲと松丸真大の国語学特殊講義を同じ水曜 4 限に開講することで、学生同士の時間調整の負担を減らすことを目指した。具体的には次のようなスケジュールで進めた。教育実習でほぼ全ての学生が不在となる第 8・9 回目の授業では、オンデマンド動画とオンライン相談会を開き、グループ活動の助けになるようにした。

回	授業内容
1	【対面】 授業の概要説明、チーム決め
2	【YouTube】 様々な辞典—今の辞典で十分か？
3	【対面・ディスカッション】 英語と日本語でズレが生じる現象を探す
4	【YouTube】 受身、来る /come など、やりもらい解説
5	【対面・ディスカッション】 受身、来る /come など、やりもらいで、英語と日本語の共通点・相違点を探す
6	【対面・ディスカッション】 (前回の続き) + 専門家会議
7	【対面・ディスカッション】 発表に向けた準備 (グループごと) 第 1 回アンケート実施
8	【YouTube】 授業の目標と分析・発表方法の例示
9	【Zoom】 発表スライド作成・発表内容相談会
10	【対面・ディスカッション】 発表に向けた最終準備 (グループごと)
11	【グループ発表 1 回目】ビデオ撮影 各グループ 20 分発表 + 質疑応答 10 分
12	【対面・ディスカッション】 第 1 回目発表質疑を踏まえて発表内容について議論する (場所を変えて)
13	【対面・ディスカッション】 牧野先生・永田先生からのコメントビデオを視聴し、それを踏まえて議論する
14	【対面・ディスカッション】 牧野先生・永田先生からのコメントを踏まえて最終発表に向けて議論する
15	【グループ発表 2 回目】ビデオ撮影 各グループ 30 分発表 第 2 回アンケート実施

2.2.1. テーマ

今年度は「言語教育に役立つ辞書を作る」ことを目標にした。ここでの「言語教育」とは英語・国語を包括したことばの教育を指す。第2回配信の動画では、現在の国語辞典・英語辞典に載っていないことを取り上げて本科目の目標を伝えた。その上で「日本語と英語で辞書の記述は同じなのに、実際に使ってみるとズレが生じる現象を探す」という課題を課し、第3回の対面授業回で議論した。この時点で色々な現象が出てきたが、そのせいで各グループがテーマを絞りきれずにいた。そこで第4回配信の動画ではダイクシス (deixis) が関わる現象、特に受身・移動表現 (行く / 来る, go/come)・授受表現 (やりもらい) に焦点を当てて解説した。そして、各グループは上の3つのいずれかを選んで分析・発表するようにした。

2.2.2. 専門家会議

授業の中盤では、グループで議論が活発になるように「専門家会議」を設けた。今回は上記テーマに関する論文を4種類用意して全グループに配布した。各グループでは論文を担当するメンバーを決める。このようにグループ内のメンバーはそれぞれa論文、b論文、c論文…を担当することになり、各メンバーが論文の内容を把握していなければグループ内の議論が進まない。ただしa論文を担当している人は他のグループにもいる。そこで、a論文を担当している人、b論文を担当している人がそれぞれ集まって、論文の内容についての理解を深めることを企図した (図1)。

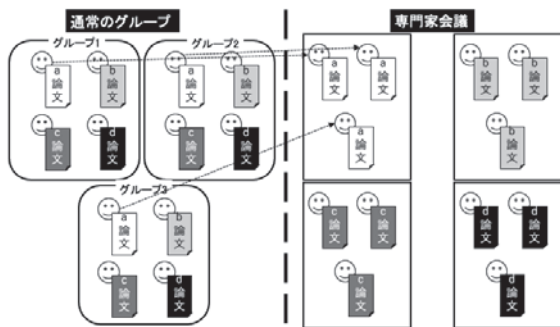


図1 専門家会議

2.2.3. グループ発表

グループでの発表と発表資料を最終的な成果とした。発表は2回実施し、どちらも録画した。録画した発表はどちらも牧野先生と永田先生に見ていただいた。1回目の発表についてはコメントをビデオレター形式でもらい、2回目の発表に反映されるようにした。2回目の発表は附属中学校の生徒に見てもらった (次節参照)。

3. 附属からみた2022年度の実践例

3.1. 中学校学習指導要領から見る本活動の意義

まず、中学校学習指導要領 (平成29年告示) における国語科と外国語科との連携について示す。第1章第2

の2の(1)には「学習の基盤となる資質・能力」として、

各学校においては、生徒の発達の段階を考慮し、言語能力、情報活用能力 (情報モラルを含む)、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を育成していくことができるよう、各教科等の特質を生かし、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図るものとする (下線は永田による)。

とある。さらに、解説総則編には、「外国語科及び外国語活動は、学習対象とする言語は異なるが、言語能力の向上を目指す教科等であることから、国語科と共通する指導内容や指導方法をあつかう場面がある。そうした指導内容や指導方法を効果的に連携させることによって、言葉の働きや仕組みなどの言語としての共通性や固有の特徴への気付きを促し、相乗効果の中で言語能力の効果的な育成につなげていくことが重要である。」とある。

本活動の対象生徒である第2学年は、第1学年時より国語科と外国語科との連携を重視し、授業を実践してきた。例えば、外国語科で疑問文を指導する時期に応じて、国語科で「A話すこと・聞くこと」の中でも質問の種類を学習させ、それらをもとにして台湾にある台中市立光明国民中学校と英語を使用した交流をオンラインにて実施するに至った (写真参照)。令和4年度の本校の研究主題が「対話型の学習で育むグローバル社会に生きてはたらく資質・能力の育成」であり、「対話型の学習」を支えるうえで言語能力がさらに重要視されているのが現状である。



平成28年12月の中央教育審議会答申 (第197号)「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」の別紙2-1には、「言語能力を構成する資質・能力」では「知識・技能」として「言葉の働きや役割に関する理解」や「言語文化に関する理解」が挙げられているが、特に「言葉の働きや役割に関する理解」については「自分が用いる言葉に対するメタ認知に関わることであり、言語能力を向上する上で重要な要素である。」とある。

以上の活動や指針を鑑みてみると、日本語と英語の日常的な表現を比較しながら両者の特質にふれる教材を作成するという本活動は、この「言葉の働きや役割に関する理解」や、その先にある「言語文化に関する理解」に通じるものであり、双方の教科の学習の促進・連携を図るうえでも、意義あるものとして位置づけられると考えられる。次に、本活動と各教科の学習指導要領との関連についての詳細を見ていくこととする。

本活動では、おもに動詞の表現に焦点をあてて解説をする教材の作成が目立った。中学校国語科では文法の指導事項は「知識及び技能」の「(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項」に含まれている。文の成分や単語の類別については、第1学年の指導内容であるが、単語の

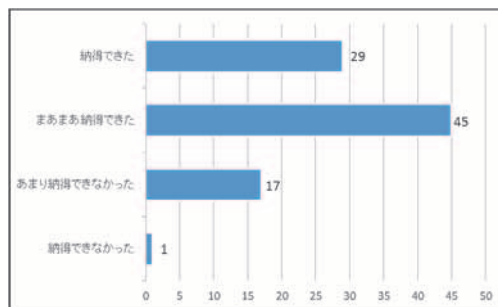
活用や助詞・助動詞などの働き、文の構成についての理解は第2学年の指導内容である。語順を含めた日本語と英語の比較をおこなうにあたっては、第2学年以降を対象としたほうが、既習の内容と照らし合わせやすいと考えられる。また、本活動にてとりあげられていた動詞の「行く・来る」「やりもらい」にあたっては、敬語の学習の際に用いる「話し手」「聞き手」「話題の中の動作の担い手」「話題の中の動作の受け手」といった概念も、説明に効果的に用いることができるものである。敬語もまた第2学年の指導内容であることから、本活動の対象はやはり第2学年以降が相当だと考えられる。とくに、「やりもらい」については、日本語では「話し手」と「聞き手」の関係性だけでなく、話題の中の人物も含めた複雑な関係性のなかで表現を無意識的に使い分けている。その実感が得られるように、例文の種類をさらに豊かにし、中学生の生活実感に根差すものであれば、なお教材として充実するものになると考える。

3.2. 教材の授業活用と生徒アンケートの結果

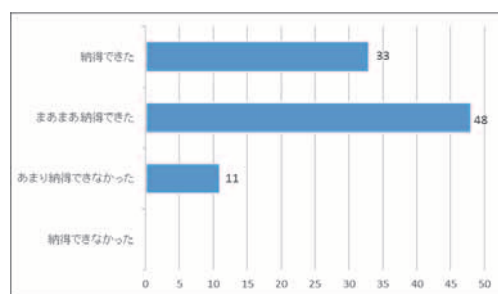
今回の大学と中学の「コラボ授業」内容を行うにあたり、動詞の「give」が取り上げられていた。現在、附属中学校の英語科で使用している教科書はNEW HORIZON(東京書籍)であるが、「give」の意味は「(～に) …を与える、渡す、もたらす」とある(教科書の巻末の資料編3Word List, p.138)。これはNEW HORIZON English Course1, 2, 3すべて同じ内容で記載されている。また、別の動詞として「go」と「come」が取り上げられていた。教科書には「go」は基本的な意味として「行く」と3学年とも記載されている。「come」は「来る、(相手のところへ・相手の同方向へ) 行く、巡ってくる」とある。

教科書に記載されている内容とは異なり、「give」は文章によっては「もらう」と訳すときがある。また中学校の生徒は基本、「go」は「行く」、「come」は「来る」で覚えている。そのため、I'm coming soon.が日本語では「もうすぐ行く」となるように、「come」を「行く」と訳すことに違和感を覚える生徒もいると思われる。これらは英語と日本語の間に見られるズレのひとつであり、滋賀大学の学生はそこに着目をした。

発表形式はパワーポイントを使ったプレゼンテーション形式で、中学生にもわかりやすい説明で、さまざまな例文を出し、イラストを使いながら視覚的にも理解しやすい工夫がされていた。滋賀大学の学生が作成した発表動画を附属中学校の第2学年の3クラス、合計92名の生徒に英語の時間を使い視聴させた後、内容が納得できるものであったかどうかやそのようなズレを感じたことがあるかどうかをアンケートで答えさせた。アンケートの結果は以下のとおりである。



giveに関するアンケート結果



goとcomeに関するアンケート結果

「give」に関する発表と「goとcome」に関する発表の両方とも約8割の生徒が「納得できる」、「まあまあ納得できる」と答えた。以下は生徒の具体的な意見を示したものである。

- ・一貫して主語と日本語・英語のずれについてはなしていたのでわかりやすかった。
- ・アニメーションで移動の方向が分かりやすく、人称の視点が分かりやすかった。
- ・「あげる」、「くれる」について考えたことがあったから。
- ・例文が分かりやすく、絵があり想像しやすかった。
- ・日本語は主観で、英語は客観を示しているからというのが分かった。だからこそ、日本語は主語が省略され英語は省略されにくいということに納得できたから。
- ・どちらも具体例を中心としたプレゼンテーションで内容を理解しやすかったし、どのように「移動」してるのかが示してあるので、英語が苦手な自分でも納得できた。ただ、やりもらいの方が自分の身近な問いだったし、日本語と英語のずれの種類が多く感じた。
- ・comeを英語でとらえるとき一人称と二人称の領域内でもとらえるということがわかりやすかった。

- ・ go, come は、それぞれ、自分の領域から出ること、出ないことでわかるということを図を使用していてわかりやすかった。また表を使用していたので、最初のほうから、どのようなことを言いたいのか理解することができた。そのため、どのようなことを今後言いたいのかわかりやすかった。また話すときに少し間を開けていてわかりやすかった。
- ・ やりもらいではパワーポイントを用いるだけでなく、ジェスチャーをつけていたり工夫していたのがよかったからです。

中学生からのアンケートの振り返り

上記の内容からわかるように、内容面に関するもので、日頃疑問に思っていたことが発表動画を見ることによって理解が促されたことがわかる。またパワーポイントのアニメーションなどの工夫やジェスチャーなどの発表のスタイルによって理解度が変わることもわかった。反対に「納得できなかった」や「あまり納得できなかった」の理由としては、「例文が多かったり、説明が長かったりして理解しづらかった」、「後半、説明が文字ばかりで正直分かりにくかった。」というものが多かった。これらを改善するためには、興味を持たせ、内容を理解させることにつながるように、生徒に飽きさせない工夫が必要であり生徒が主体的に参加できるような工夫があるとよい。

今回、滋賀大学の学生が考えた give, come/go の英語とそれらに相当する日本語のズレに関する内容は、中学校の授業で触れることはなかった。しかし、アンケートでは、give や go/come の日本語と英語のズレを感じたことがあると答えた生徒が半数以上いた。これは英作文や本文の日本語訳をする際に疑問や違和感を覚えているということを示している。今回取り上げられた give, come/go は中学校 1 年生から 3 年生まで頻出する単語である。今後はどこかで英語と日本語のズレに関して触れる機会を作り、「知識・技能」として「言葉の働きや役割に関する理解」や「言語文化に関する理解」を促していく必要がある、滋賀大学との本活動は教科学習の連携促進を図るのに意義のあるものと考えられる。

最後に、give, come/go 以外にも英語と日本語でズレを感じるかどうかを中学校の生徒にたずねてみた。以下は生徒の意見である。今後の活動の発展がたれる。

- ・ 日本語独特の言い回しが思っていた英語とは違うときがある。
- ・ see や look など同じ意味があるが、使い方の違いがよくわからない。

- ・ 助動詞の使い方（ニュアンス）、some や any など日本語にない考え方（存在）、前置詞の使い分け→気持ちなども場所として見ている感じがした。
- ・ 敬語などの日本の表現を本の中などで英語に訳すときどのようにしているのかが気になった。
- ・ 日本語における、は、が、も、のような助詞の使い分け日本人からすれば、明らかにニュアンスに違いがあるが、英語圏などの人からすれば、難しいと思う。また、このような差はどうして生まれたのか、国民性の違いなのか知りたい。
- ・ 一人称、二人称の種類の数（例えば日本語の一人称は私、僕、俺など様々な種類があるが、英語は I だけなど）

中学生が感じる日英語にまつわるズレ

3.3. 今後に向けた教材化における留意点

本節では、今後の本活動の教材作成への留意点を述べる。今回は取り上げられなかったほかの日英語のズレとして、日本語に訳すると同じ語になるのに英語では多様な単語に分かれるもの（逆も同様）、be 動詞や形式的な主語などの英語の授業の中で頻出する表現がある。3.2 節のアンケートも含めて、外国語科の授業の中の、中学生が表現する学習場面において感じる困難や違和感を解消するための教材が実現すれば、より学校現場のニーズに沿うものになると思われる。

また、国語科・外国語科のいずれにおいてもスライド等の視覚資料を用いて発表をするという学習に生徒は取り組み、教員はそれを評価する。教員がおこなうスライドを使ったプレゼンテーションは、生徒にとっては模範的なものでなければならぬ。プレゼンテーションにおける、1 枚のスライドの中の適切な情報量や、効果的な構成については、国語科・外国語科の教員養成においては重要である。さらに、そのスライドの作成には、人権意識が求められる。大学生が作成した 1 回目の教材のイラストでは、上下関係や「やりもらい」の場面で、女性が下位の立場であることや、行為の受け手になることが繰り返されている印象を受けるものであり、改善を求めた。人権意識への配慮の必要性が背景にあったからである。教材作成においては、今後もこの点に十分配慮して、教員としての資質を磨いていく必要があるだろう。

4. コラボ授業の評価と効果

第 2 節と第 3 節で紹介したように、2022 年度のコラボ授業では、大学の英語学と国語学をコラボした内容が実際の教育現場でどのように活かされるかということを探った。この授業形態は、はじめての取組であったため、15 回の授業のうち、半分ほど経過した時点で授業アンケートをおこなった。15 回の授業が終わった後にも別の授業アンケートをおこなった。以下では、授業アンケートに寄せられた学生の（悲痛な）声を報告する。

まず、コラボ授業の満足度に関する第 1 回目の授業アンケート結果についての報告をする。第 1 回目の回答者数は 18 件で、満足度 (5 点満点) の平均は 3.33 であった。これは 2021 年度のコラボ授業の第 1 回目の満足度の平均が 3.8 だったのと比べてやや低い結果となった。その理由は、教育実習に行く直前というタイミングだったこと、また授業の方向性がよくわからないということが大きな原因だったと思われる。以下、学生から寄せられた質問と要望に関する具体的なコメントを紹介する。なお、コメント内容の誤字脱字・略語・表現に関しては、内容に支障がない程度に修正を行なっている。また、紙幅の関係ですべてのコメントは掲載していない(第 2 回目の授業アンケート報告についても同じである)。

質問	<p>辞書をつくる等、完成形があまり見えてこないため、どういう方向性を目指すべきなのか分からないため、分からないことが分からないという状態に留まっています。今日の発表のようなことがこの授業の方向性なのでしょうか。</p> <p>話し合いの中で、辞書を作るという漠然とした目的の中で方向性が定まらず、何をすればいいのか明瞭になりません。これまでの先輩方の様子や英語コース、国語コースの意見交流(例えば松丸先生と于先生がテーマを決めて辞書を作っていくならどんな関わり方をしていくのか)などについてもう少し知りたいです。</p>
要望	<p>英研の方にとっては英語を教える際にプラスになるかもしれないのですが、現時点で国語学ということで学びになることは多いのですが、国研側にとってはプラスになることが少ないように思えました。</p> <p>自分の中で授業の方向性が明瞭になっていません。英語科の人たちにとっては日本語を介した上で指導するために必要なことであるのかもしれませんが、国語科の人たちがどのような目的を持って、どのようなゴールに向かってこの研究課題に取り組む必要があるのかが分からない為、何をしても良いかも分かりません。</p> <p>現段階で日本語に加え、英語にも言語学として向き合うこの講義をかなり難しく感じています。正直なところ、実習前でこれまで以上に時間配分がハードな中、この課題に向き合っていることをもったいなく感じ始めています。この課題を形にされてきた先輩方がどのように交流し、進めてきたのかとても気になります。今の形が最善なのかもしれませんが、ここまで講義を受けてきて、講義の時間外で話し合いの場を持ち、内容を深めていくことがかなり困難です。</p>

第 1 回目授業アンケート

この時点で学生たちがとくに困っていたのは、国語教育をするにあたって、英語の知識が活かせるのか、あるいは、どのように活かすのかということだったと思われる。学習指導要領などでは、国語科と外国語科の連携が推奨されているが、これから教員になる学生にとっては、その肌感覚がないのである。これらの反省点を踏まえて、後半の授業では、英語の知識をどのように国語を教える際に活かすか(かつその逆も)、という点を中心に改善をおこなった。そして、第 1 回目の授業アンケートをとる際に、大学生に対して、「現在取り組んでいるプロジェクト内容を附属中学校とその生徒にみてもらい、フィードバックをもらう予定である」ことを伝えた。そうすると、18 名の半数 9 名が「やる気が増した」と回答した(ちなみに、「やる気に変化はない」と回答したのは 7 名、「やる気が下がった」と回答したのは 2 名であった)。

つぎに、第 2 回目のアンケート結果をもとに、第 1 回目の反省点が改善できたかについて試みる。²今回は、質問項目である「教育現場で役に立つ辞書作りという取組」「YouTube と対面の反転授業」「附属教員からのアドバイスを取り入れたことによって大学だけでは学べないことがあったか」「振り返ってみてこの授業を通して困った」「振り返ってみてこの授業を通して身につけたこと」の 5 点について、以下の具体的な回答が得られた。

教育現場で役に立つ辞書作りという取組	<p>取り組み自体は良いと思うが、“辞書”という言葉が何か学習者にとって引っかかるというか、何か終始この単語に惑わされる感じがありました。少なくとも私はそうでした。</p> <p>辞書作りという取り組みにわくわくした。一方で、中学生向けにテーマを 1 つに絞るようになったことで、はじめに想像していた、辞書作りという取り組みからズレを感じた。</p>
YouTube と対面の反転授業	<p>YouTube の利点が生かせる授業の内容の時に YouTube を活用して下さっていたことで、繰り返し見返ししながら自分のペースで学ぶ時間をつくることができました。</p>
附属教員からのアドバイスを取り入れたことによる大学だけでは学べないことがあったか	<p>実際の生徒の理解度や、辞書作りにかかわる部分での既習の内容を教えていただけたことでより対象を意識して考えることができた。</p> <p>生徒が学ぶ姿を毎日見ているからこそ分かること、気づけることが、中学年を対象とした発表を考える上で、私にはなかった視点だったと思いました。</p>

振り返ってこの授業を通して困ったこと	曖昧なところから出発されたのが非常に困った。特に初めの第1回発表までの時間は実習があったこともさらに相まって、充実した時間とはいえなかった。
	7人というチームでの活動では、どうしても活動量に違いが生まれてきて、ほとんど内容に関わらずに発表をする人もおり、全員が役割と責任をもって行うことができなかったこと。
	授業外の時間で準備をするとのことであったが、メンバー全員の時間が合う時がなく、頑張ってくれている人と参加しない人で差が生まれてしまっていた。
	話し合いの時間が少ないこと、話し合いの時に無断で欠席したり、発表当日に欠席が出てしまうと再度打ち合わせができないこと
	何を目指すべきなのか、なかなか見えてこなかったことが発表準備をする上で方向性を絞りきれず難しいと思った。辞書づくりといっても辞書という形にこだわるべきなのか、発表を意識したものにするのか、考えている段階で曖昧すぎたため困ったなと感じた。
振り返ってこの授業を通して身につけたこと	多角的に試してみるということを学ぶことができたように思う。先入観にとらわれすぎて結論もその方向にもっていかれてしまうことがあったが、こういう検証をすると決めて進めることも時には必要だと思いが、まずは例文を集める等、数をだして見つめていくことも大切だと気づいた。
	対象を意識して、対象に向かって「伝える」ためには、調べたり考えたりしたことをただ話すだけでなく、視覚的、聴覚的な理解にも働きかける工夫ができるということ。また、7人というチームであったからこそ、全員で知識を補い合いながら、チームのために自分ができることを積極的に考えるということ。
	根気強く向き合うこと
	当たり前だと思っていたことを疑い、自ら調べて考えること
	広い視野から言語を捉えること、言語に関する研究・検証方法

第2回目のアンケート内容からみると、第1回目の反省点を完全に改善できたとはいえない。今後の課題も含めて、授業を振り返ってみたい。まず、「辞書作り」ということばに縛られて、なかなかイメージしていた内容にならなかったことが反省点として挙げられる。一方で、発表内容に対して附属教員からアドバイスをいただくことで、より中学生の実情を意識することができたことは前向きにとらえられる。3.2節で、「中学生の約8割の生徒が「納得できる」「まあまあ納得できる」と答えた」とあることから、改善がうまくいったものと思われる。ただし、教育現場でより役に立つ授業内容にするためには、3.2節と3.3節で指摘があったように、中学生が感じている日英語のズレなどについて内容を広げて、中学生が学習場面において感じる困難や違和感を解消するための教材作成が実現することが望まれる。

グループ活動としての反省点としては、細部にわたって指導を行うことができなかったことが挙げられる。それぞれのメンバーの授業に取り組む姿勢や授業外での参加に関して、課題がみえた。一方で、授業で使っているTeamsのチャンネルをみると、授業外の時間に相当数、議論を重ねている実績もみえる。これはYouTubeでの講義についても同じことがいえる。YouTubeの講義の再生回数は、受講生を超えているので、繰り返し勉強するのに役立っているものと思われる。実際、上のコメントでも「自分のペースで学ぶ時間がとれた」とある。このYouTubeと対面の反転授業は2021年度のコラボ授業でも好評で今後も続けてほしい取組みの1つであった(松丸・于2021)。学生がこの授業を通して身につけたと思うことに関しては、「広い視野をもつこと」「先入観にとらわれずに疑いの目をもつこと」「研究の結果をわかりやすく伝えるためにさまざまな工夫が要ること」などが挙げられる。これらは、教科横断のコラボ授業を行う利点であると考えられる。

最後に、今回のコラボ授業がもたらす成果について触れたい。コラボの成果は、(うまくいかないこともあるが)、やはり「連携がうまれる」ことだと思う。連携は人と人のつながりを深め、新しい世界へと導いてくれる。連携をきっかけとして、学生同士や教員同士の人間関係において、そして、国語学と英語学の学問間において、国語教育と外国語教育の教科教育間において、さまざまな相乗効果が期待できる。このシネジスティック(synergistic)な産物は、学生の視野を広げることができるとともに、分野横断的な視点を育むというSTEAM教育がめざす教育的効果も得られる。そして、教育学部の充実・発展にかかわって、学生が自ら課題を見つけ解決に取り組む力、ものごとを相対的に見る力などの教員に必要な力が養えると考えられる。コラボ授業の先には、将来、生徒と向き合い、現場で活躍する多様な視点をもった教員の存在がみえるのである。

第2回目の授業アンケート

注

- 1 本研究は「令和4年度学部プロジェクト研究経費」(研究テーマ:「国語学・英語学を中学校国語・英語に活かすシネジスティックな言語教育」)の支援を受けている。執筆にあたっては、1節と4節を于一楽、2節を松丸真大、3.1節と3.3節を永田郁子、3.2節を牧野尚史が担当し、全体の文章の推敲と校正に関しては全員で行った。
- 2 第2回目の授業アンケートの回答者数は5件で、満足度(5点満点)の平均点は3.2だった。第1回目(18件の回答)だったため、満足度を比較する材料とはならなかった。

参考文献

- 国重徹・小川仁志(2011)「英語担当教員と倫理担当教員のコラボ授業の試みとその効果—即効性のある授業改善FDの実現を目指して—」『高専教育』第34号, 227-232.
- 古石篤子(2016)「公教育における多言語教育」森住衛・古石篤子・杉谷真佐子・長谷川由起子(編)『外国語教育は英語だけでいいのか—グローバル社会は多言語だ!—』、くろしお出版, pp.15-28.
- 東京都板橋区立中台中学校(2021)「国語×理科、家庭科×美術、英語×体育…教科同士のシナジーを生む「コラボ授業」」『総合教育技術』2021年10・11月号, 28-35.
- 蓮尾直美・伊藤信成・三輪辰男・山中伸一・上山浩・萩原彰・平賀伸夫・杉村伸一(2009)「学部教員と附属学校教員による連携授業の試み—教員育成としての学部・附属学校教育の改善と充実をめざして—」『日本教育大学協会研究年報』27, 241-254.
- 松丸真大・于一楽(2021)「「I love you」と「私はあなたを愛している」—英語と国語から「ことば」のしくみを考えるコラボ授業—」『滋賀大学教育実践研究論集』第4号, pp.99-106.
- 向美由紀(2014)「音楽と美術のコラボ授業～ヴィジュアルディ作曲「春」を鑑賞する授業の試み～」『生活指導』No.713, 62-69.
- 文部科学省(2017)『小学校学習指導要領(平成29年告示)』
https://www.mext.go.jp/content/1413522_001.pdf
- 文部科学省(2017)『中学校学習指導要領(平成29年告示)』
https://www.mext.go.jp/content/1413522_002.pdf
- 文部科学省(2018)『高等学校学習指導要領(平成30年告示)』
https://www.mext.go.jp/content/1384661_6_1_3.pdf
- 文部科学省(2018)『高等学校学習指導要領(平成30

年告示) 解説:外国語編・英語編』

https://www.mext.go.jp/content/1407073_09_1_2.pdf

文部科学省(2019)『外国語(英語)コアカリキュラムについて』

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2019/04/04/1415122_3.pdf

Shimazaki Midori, Yoko Suzuki, Adrienne Nicosia (1995) Designing a Joint Class: Activities for Students in the English Language Program and the Japanese Language Program. *Language Research Bulletin* Vol.10, 43-57.

教科書

- New Horizon English Course 1 (2021) 東京書籍.
New Horizon English Course 2 (2021) 東京書籍.
New Horizon English Course 3 (2021) 東京書籍.